

## 姿勢による非言語的情報の読み取りに及ぼす性別 および性役割の影響：予備的報告

丹治 哲雄<sup>1)</sup>・岸 太一<sup>2)</sup>

### Influence of sex and sex roles on receiving non-verbal information with posture : Preliminary report.

TAJIMI, Tetsuo and KISHI, Taichi

38 undergraduates (18 males and 20 females) were asked to imagine others who took nine postures (for example, "the slump posture", "the backward posture"). After the imagination session, they were asked to evaluate the impression of the others who had taken these postures with 16 items on 9 point scales. Moreover, they were asked to answer the Bem Sex Role Inventory (Bem, 1974). In this report, the analysis of impressions of the others who had taken "the slump posture" was addressed. "The slump posture" impressed the subjects disappointedly, diffidentally, sadly, vacillatingly, and with an inferiority complex. Sex difference was not obtained in this impression. But, as results of the sex role score, lower masculinity or higher femininity in male subjects tended to evaluate these negative impressions from "the slump posture" emphatically. Moreover, although it was not so remarkable, lower masculinity or higher femininity in female subjects did so. The relationship between receiving of non-verbal information with posture and the sex role was discussed.

1) 文教大学人間科学部心理学研究室

2) 1993年度文教大学人間科学部卒業生・(現)早稲田大学大学院人間科学研究科健康科学専攻修士1年

## I. 緒言

言語によらず、もっぱら身体的な活動によって何らかの情報が送り出され、またそのような情報が他者に受け取られるとき、そのようなコミュニケーションを非言語的コミュニケーション（ノンバーバル・コミュニケーション）と言い、そのようなコミュニケーションを支える身体的活動を非言語的行動（ノンバーバル行動）という（春木, 1987）。非言語的行動としては表情や身振り（しぐさ）、またはジェスチャーなどがよく知られているが、その他にも姿勢や音声、アイコンタクトなども非言語的行動の一部である（春木, 1987）。

非言語的行動については古くからその存在については言われてきたが、心理学が非言語的行動を研究の対象とするようになったのは主に1960年代からである。そして、多くの研究が文化差や性差の存在を指摘しており、特に性差に関しては非言語的な情報を読み取る際の感受性、すなわち非言語的情報に対する感受性の問題として研究されてきている。その結果、多くの研究が男性に比べて女性の方が非言語的な情報に対する感受性が高いということを明らかにしている。

筆者らは、男性および女性の被験者にイメージの中で幾つかの姿勢をとる他者を想起してもらい、その他者に対する印象についてのデータを収集してきた。ここではそれらのデータを用いて、姿勢の印象評定に及ぼす性差の影響を検討し、さらに単に性差ばかりではなく、性役割の影響についても検討を試みることにした。

ただ、ここで検討した姿勢は「まえかがみ」姿勢一つに限定してある。そのため、本報告は限られた一つの姿勢についての予備的分析の報告であることをあらかじめ記しておきたい。

## II. 実験方法

### [1. 被験者]

実験全体の被験者は大学生76名（男性36名女性40名）である。平均年齢は21.42才（標準偏差=1.38）であった。

### [2. 実験場所および期間]

本実験は文教大学越谷校舎脳波ポリグラフ室で、1993年10月5日から同年12月16日までの期間におこなわれた。

### [3. 手続き]

(1)まず、被験者には実験者が指定する幾つかの姿勢をとる他者をイメージしてもらうこと、(2)その後、イメージした他者の印象を16項目9段階尺度の形容詞対によって評定してもらうこと、(3)その後、性役割尺度に回答することなどを依頼した。

### [4. イメージする他者の姿勢とイメージ想起中の被験者の姿勢]

(1)イメージの中で他者がとる姿勢については工藤・西川（1984）が用いた姿勢語の中から9つを選び出した。①胸を張っている、②まえかがみになっている、③頭をかかえている、④身をのりだしている、⑤背を向けている、⑥顔をそむけている、⑦肩をいからせている、⑧あごに両手をつけている、⑨頭の後ろで両手を組んでいる、の9姿勢である。すべての被験者にこの9姿勢をとる他者をイメージしてもらった。(2)他者をイメージする際の被験者の姿勢は、①まえかがみ、②そっぽをむいている、③あごに手をつけている、④普通、の4姿勢を設定した。各姿勢を取る被験者は1姿勢につき18名とした。

### [5. 印象評定項目・性役割尺度]

(1)イメージの中の他者がとる姿勢の印象評定には、工藤・西川（1984）が用いたものをそのまま使用した。「自信に満ちている—自信をなくして

いる」、「安心している—おそれている」、「関心を持っている—無視している」など計16項目である（項目の詳細は結果を参照）。(2)性役割尺度としては40項目からなるBem (1974) の性役割尺度 (Bem Sex-Role Inventory: B S R I) を使用した。

### [6. 結果分析方法]

工藤・西川 (1984) は姿勢の意味構造を調べ、姿勢の意味次元は3次元構造からなることを明らかにし、その3つの次元を各々「自己充実性」、「対人的好意性」、「対人的意識性」と命名している。(1)そこで、ここでも、イメージした他者の姿勢に対する印象評定結果の因子分析を行うことにした。因子分析にはイメージ中に「普通」の姿勢をとってもらった18名の被験者が想起した9姿勢すべてのデータを用いた。(2)次に、イメージ中の他者の姿勢の印象評定に及ぼす性差および性役割の違いについて検討を加えた。この分析には、「まえかがみ」の姿勢をとる他者についてのデータのみを使用した。さらに、この分析の対象としたのは、「普通」の姿勢をとった被験者と「まえかがみ」の姿勢をとった被験者の合計38名（男子18名女子20名）のデータを用いた。「まえかがみ」の姿勢を分析の対象とした理由は、実験中に被験者がとった4つの姿勢の中では、「普通」の姿勢の次に比較的被験者がとりやすい姿勢であったことによる。被験者のとった「普通」の姿勢および「まえかがみ」の姿勢の間で、印象評定の16項目ごとにt検定を行った結果、いずれの項目でも有意差は認められなかったので、本報告では両姿勢のデータをまとめて処理することにした。(3)本報告での統計的分析にはt検定を用いたが、有意確率は有意差傾向を含めた10%水準以下を採用した。

### III. 実験結果

[1. イメージ中の他者の姿勢に対する印象評定の因子分析結果]

表1に9姿勢に対する印象評定の因子分析結果を示す。その結果、3因子が抽出された。因子1には「自信」「優越感」「決心」などの6項目が含まれ「自信決断因子」と命名された。因子2には「好意」「関心」「親しみ」「信頼」「尊敬」などの7項目が含まれ「対人感情因子」と命名された。因子3には「緊張」「恐れ」「身構え」の3項目が含まれ「緊張因子」と命名された。本報告では以降の分析にこうした因子別の分析も併せて行うことにした。

表1. 9姿勢に対する印象評定の因子分析結果（直交回転後の因子負荷量・バリマックス法）。N=18による。

項 目 名	因子1	因子2	因子3
3. 自信にみちている—自信をなくしている	0.8816	0.0433	-0.2126
6. はりきっている—落胆している	0.8182	0.3564	0.0273
2. 優越感をもっている—劣等感をもっている	0.7951	-0.1121	-0.3359
4. 喜んでいいる—悲しんでいる	0.7444	0.4314	-0.2583
14. 決心している—迷っている	0.7317	-0.0187	0.0116
12. おうへいな—へりくだった	0.5722	-0.2239	-0.1002
13. 好意をもっている—嫌っている	0.1014	0.8228	-0.2866
9. 関心をもっている—無視している	0.0609	0.7581	0.0623
11. 敵意をもっている—親しみをもっている	-0.0648	-0.7538	0.4586
10. 信頼している—疑っている	0.2981	0.6642	-0.3555
8. 機嫌の良い—機嫌の悪い	0.4519	0.6635	-0.3600
5. 尊敬している—軽蔑している	-0.2211	0.6198	0.0331
16. 怒っている—冷静である	-0.0719	-0.4965	0.4424
1. 緊張している—くつろいでいる	-0.2285	-0.1520	0.7531
7. 安心している—恐れている	0.5535	0.3457	-0.5821
15. 身構えている—開放的である	-0.2035	0.4537	0.7177
因子負荷量2乗和	4.2610	4.0584	2.4058
寄与率(%)	26.6314	25.3652	15.0365
累積寄与率(%)	26.6314	51.9965	67.0331

[2. 「まえかがみ」姿勢に対する印象評定に及ぼす性差の影響]

「まえかがみ」姿勢に対する全被験者の印象評定結果を表2Aに、また、そのプロフィールを図1に示した。9段階尺度の中央値5点を基準に、尺

度値4点以下6点以上でみると、「まえかがみ」の姿勢は「落胆し(7.05)」「自信をなくし(6.84)」「悲しみ(6.61)」「迷っていて(6.58)」「劣等感を持っている(6.51)」という否定的な印象を被験者に与えていたことが明らかになった。こうした項目はすべて第1因子の「自信決断因子」に属する項目であった。また、表2Bに男子被験者の、表2Cに女子被験者の平均印象評定結果を示す。両群間で項目ごとのt検定を行った結果(表2D)、いずれの項目でも有意な性差は認められなかった。また、表3に「まえかがみ」姿勢に対する男女別の3因子別平均印象評定結果と男女間のt検定結果を示した。因子別の平均印象評定結果についても有意な性差は認められなかった。

表2. 「まえかがみ」姿勢に対するA. 全被験者、B. 男子被験者、C. 女子被験者の平均印象評定結果と標準偏差。Dは男女間のt検定結果。

項 目 名	A. 全被験者 (N=38)		B. 男子被験者 (N=18)		C. 女子被験者 (N=20)		D. t 検定結果	
	平均 得点	標準 偏差	平均 得点	標準 偏差	平均 得点	標準 偏差	t 値	有意 確率
3. 自信にみちている—自信をなくしている	6.48	1.23	6.94	1.21	6.75	1.29	0.477	ns
6. はりきっている—落胆している	7.05	1.28	7.11	1.08	7.00	1.49	0.261	ns
2. 優越感をもっている—劣等感をもっている	6.51	1.24	6.82	1.33	6.25	1.16	1.397	ns
4. 喜んでいいる—悲しんでいる	6.61	1.39	6.89	1.35	6.35	1.35	1.187	ns
14. 決心している—迷っている	6.58	1.16	6.56	1.34	6.60	1.05	0.115	ns
12. おうへいな—へりくだった	5.92	1.46	5.94	1.31	5.90	1.65	0.091	ns
13. 好意をもっている—嫌っている	5.00	1.08	4.94	1.06	5.05	1.15	0.294	ns
9. 関心をもっている—無視している	4.82	1.00	4.83	1.15	4.80	0.89	0.100	ns
11. 敵意をもっている—親しみをもっている	5.03	1.33	5.00	1.33	5.05	1.40	0.113	ns
10. 信頼している—疑っている	5.29	1.59	5.39	1.79	5.20	1.47	0.357	ns
8. 機嫌の良い—機嫌の悪い	5.79	1.26	6.11	1.13	5.50	1.36	1.498	ns
5. 尊敬している—軽蔑している	5.11	0.72	5.22	0.43	5.00	0.92	0.939	ns
16. 怒っている—冷静である	5.40	1.23	5.33	1.03	5.45	1.43	0.286	ns
1. 緊張している—くつろいでいる	4.82	1.59	4.44	1.79	5.15	1.39	1.366	ns
7. 安心している—恐れている	6.05	1.52	6.17	1.62	5.95	1.50	0.428	ns
15. 身構えている—開放的である	4.45	1.87	4.11	2.05	4.75	1.74	1.037	ns

姿勢による非言語的情報の読み取りに及ぼす性別および性役割の影響

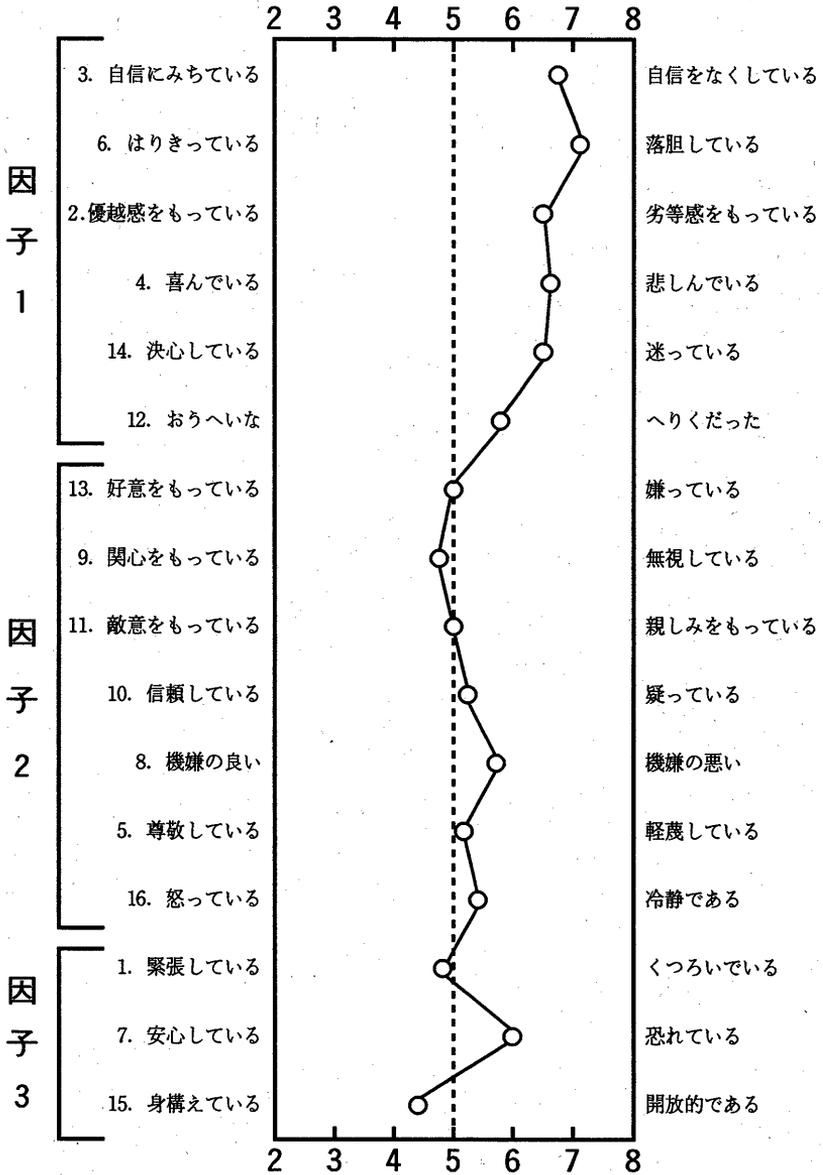


図1.「まえかがみ」姿勢に対する平均印象評定結果のプロフィール。表4(A)に基づく。N=38。

表3. 「まえかがみ」姿勢に対する男子被験者・女子被験者の因子別の平均印象評定結果。t検定は男女間のt検定結果。

因子名	男子被験者 (N=18)		女子被験者 (N=20)		t検定結果 有意 確率	
	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	t値	
1. 自信決断因子	6.65	1.00	6.48	1.00	0.533	ns
2. 対人感情因子	5.17	0.77	5.01	0.85	0.605	ns
3. 緊張因子	4.13	1.67	4.65	1.25	1.098	ns

[3. 「まえかがみ」姿勢に対する印象評定に及ぼす性役割の影響]

(1) 性役割尺度得点結果

表4に男子被験者・女子被験者の性役割尺度平均得点などを示す。

表4. 男子被験者・女子被験者の性役割尺度平均得点・標準偏差・最高得点・最低得点

	男子被験者 (N=18)		女子被験者 (N=20)	
	男性性得点	女性性得点	男性性得点	女性性得点
平均得点	86.39	89.06	76.45	81.25
標準偏差	14.90	7.17	19.73	9.53
最高得点	120.00	102.00	112.00	98.00
最低得点	63.00	76.00	56.00	61.00

(2) 男性性・女性性の高得点者群と低得点者群の設定

次に「まえかがみ」姿勢に対する印象評定に及ぼす性役割の影響を検討するために、男性被験者・女性被験者ごとに男性性得点・女性性得点のそれぞれの中央値を基準にして高得点者群と低得点者群を設定した。各群の人数や性役割尺度の平均得点などを表5に示した。

(3) 男性性・女性性の高・低得点者群の「まえかがみ」姿勢に対する印象評定結果

表6に男性被験者の男性性・女性性の高得点者群と低得点者群の「まえかがみ」姿勢に対する平均印象評定結果および高得点者群・低得点者群間のt検定結果を示す。男性被験者の男性性で見ると、低得点者群で、「ま

表 5. 性役割尺度による男性性・女性性の高得点者群と低得点者群の平均得点・標準偏差・最高得点・最低得点

	男子被験者 (N=18)				女子被験者 (N=20)			
	男性性		女性性		男性性		女性性	
	高得点者群 (N=9)	低得点者群 (N=9)	高得点者群 (N=9)	低得点者群 (N=9)	高得点者群 (N=10)	低得点者群 (N=10)	高得点者群 (N=10)	低得点者群 (N=10)
平均得点	98.67	74.11	94.89	83.22	89.20	63.70	89.30	73.20
標準偏差	9.68	6.97	4.70	3.55	10.05	5.39	4.84	5.34
最高得点	120.00	84.00	102.00	87.00	112.00	72.00	98.00	79.00
最低得点	85.00	63.00	89.00	76.00	74.00	56.00	81.00	61.00

えかがみ」姿勢を、より「落胆し」「劣等感を持ち」「機嫌が悪い」と否定的に強調して評定する結果が得られた。次に、男性被験者の女性性で見ると、高得点者群で「まえかがみ」姿勢を、より「自信をなくし」「落胆し」「劣等感を持ち」「迷っており」「機嫌が悪い」と否定的に強調して評定する結果が得られた。この女性性高得点者群の傾向は有意差のあった項目数で見ると、男性性低得点者群のそれよりも顕著なものであった。

表 7 に女性被験者の男性性・女性性の高得点者群と低得点者群の「まえかがみ」姿勢に対する平均印象評定結果および高得点者群・低得点者群間の t 検定結果を示す。女性被験者の男性性で見ると、低得点者群で「まえかがみ」姿勢を、より「軽蔑し」「くつろいでいる」と評定する結果が得られた。次に、女性被験者の女性性で見ると、高得点者群で「まえかがみ」姿勢をより「悲しんでいて」「おそれている」と評定する結果が得られた。

#### (4) 男性性・女性性の高・低得点者群の「まえかがみ」姿勢に対する因子別印象評定結果

表 8 および表 9 に男性被験者と女性被験者の男性性・女性性の高・低得点者群の「まえかがみ」姿勢に対する因子別印象評定結果を示す。第 1 因子の「自信決断因子」では女性被験者の男性性の高低で差が見られなかった以外は、他の比較ではすべて有意差が認められた。第 2 因子の「対人感

表6. 男性被験者の男性性・女性性の高得点者群と低得点者群の「まえかがみ」姿勢に対する平均印象評定結果と標準偏差および両群間のt検定結果。

項 目 名	男性性						女性性					
	高得点者群 (N=9)		低得点者群 (N=9)		t 検定結果		高得点者群 (N=9)		低得点者群 (N=9)		t 検定結果	
	平均 得点	標準 偏差	平均 得点	標準 偏差	t 値	有意 確率	平均 得点	標準 偏差	平均 得点	標準 偏差	t 値	有意 確率
3. 自信にみちている—自信をなくしている	6.56	1.51	7.33	0.71	1.400	ns	7.67	0.71	6.22	1.20	3.108	0.007
6. はりきっている—落胆している	6.67	1.12	7.56	0.88	1.873	0.080	7.56	1.13	6.67	0.87	1.873	0.079
2. 優越感をもっている—劣等感をもっている	6.25	1.75	7.33	0.50	1.781	0.095	7.33	1.12	6.25	1.39	1.781	0.095
4. 喜んでいる—悲しんでいる	6.44	1.67	7.33	1.12	1.329	ns	7.44	1.42	6.33	1.32	1.715	ns
14. 決心している—迷っている	6.33	1.50	6.78	1.20	0.694	ns	7.11	1.36	6.00	1.12	1.890	0.077
12. おうへいな—へりくだった	5.89	1.05	6.00	1.58	0.175	ns	6.33	1.12	5.56	1.42	1.289	ns
13. 好意をもっている—嫌っている	4.89	1.27	5.00	0.87	0.217	ns	5.00	1.12	4.89	1.05	0.217	ns
9. 関心をもっている—無視している	5.00	1.23	4.67	1.12	0.603	ns	4.56	1.13	5.11	1.17	1.026	ns
11. 敵意をもっている—親しみをもっている	5.00	1.00	5.00	1.66	0.000	ns	4.89	1.76	5.11	0.78	0.346	ns
10. 信頼している—疑っている	5.22	1.48	5.56	2.13	0.386	ns	5.67	2.24	5.11	1.27	0.648	ns
8. 機嫌の良い—機嫌の悪い	5.33	0.87	6.89	0.78	4.000	0.001	6.67	1.00	5.56	1.01	2.341	0.033
5. 尊敬している—軽蔑している	5.33	0.50	5.11	0.33	1.109	ns	5.22	0.44	5.22	0.44	0.000	ns
16. 怒っている—冷静である	5.11	0.78	5.56	1.24	0.912	ns	5.22	1.20	5.44	0.88	0.447	ns
1. 緊張している—くつろいでいる	4.44	1.81	4.44	1.88	0.000	ns	4.44	2.19	4.44	1.42	0.000	ns
7. 安心している—恐れている	5.56	1.81	6.78	1.20	1.687	ns	6.67	1.94	5.67	1.12	1.342	ns
15. 身構えている—開放的である	4.67	2.12	3.56	1.94	1.159	ns	3.44	2.51	4.78	1.30	1.417	ns

表7. 女性被験者の男性性・女性性の高得点者群と低得点者群の「まえかがみ」姿勢に対する平均印象評定結果と標準偏差および両群間のt検定結果。

項目名	男性性					女性性						
	高得点者群 (N=10)		低得点者群 (N=10)		t 検定結果  有意 t 値 確率	高得点者群 (N=10)		低得点者群 (N=10)		t 検定結果  有意 t 値 確率		
	平均 得点	標準 偏差	平均 得点	標準 偏差		平均 得点	標準 偏差	平均 得点	標準 偏差	t 値	確率	
3. 自信にみちている—自信をなくしている	6.60	1.17	6.90	1.45	0.509	ns	7.10	1.20	6.40	1.35	1.227	ns
6. はりきっている—落胆している	6.80	1.48	7.20	1.55	0.591	ns	7.50	1.43	6.50	1.43	1.560	ns
2. 優越感をもっている—劣等感をもっている	6.30	1.25	6.20	1.14	0.187	ns	6.50	0.97	6.00	1.33	0.958	ns
4. 喜んでいる—悲しんでいる	6.30	1.49	6.40	1.27	0.162	ns	6.90	1.20	5.80	1.32	1.995	0.066
14. 決心している—迷っている	6.40	1.17	6.80	0.92	0.849	ns	6.70	0.95	6.50	1.18	0.418	ns
12. おうへいな—へりくだった	6.40	1.35	5.40	1.84	1.387	ns	6.50	1.43	5.30	1.70	1.705	ns
13. 好意をもっている—嫌っている	5.00	1.25	5.10	1.10	0.190	ns	5.00	1.25	5.10	1.10	0.190	ns
9. 関心をもっている—無視している	4.50	1.08	5.10	0.57	1.555	ns	4.90	0.99	4.70	0.82	0.490	ns
11. 敵意をもっている—親しみをもっている	5.20	1.48	4.90	1.37	0.471	ns	4.90	1.20	5.20	1.62	0.471	ns
10. 信頼している—疑っている	5.00	1.76	5.40	1.17	0.597	ns	5.60	1.35	4.80	1.55	1.231	ns
8. 機嫌の良い—機嫌の悪い	5.80	1.75	5.20	0.79	0.988	ns	5.60	1.17	5.40	1.58	0.322	ns
5. 尊敬している—軽蔑している	4.60	0.70	5.40	0.97	2.121	0.048	5.00	1.25	5.00	0.47	0.000	ns
16. 怒っている—冷静である	5.70	1.42	5.20	1.48	0.773	ns	5.50	1.27	5.40	1.65	0.152	ns
1. 緊張している—くつろいでいる	4.60	1.27	5.70	1.34	1.890	0.075	5.10	1.29	5.20	1.55	0.157	ns
7. 安心している—恐れている	5.90	1.73	6.00	1.33	0.145	ns	6.60	0.97	5.30	1.70	2.100	0.050
15. 身構えている—開放的である	4.50	2.17	5.00	1.25	0.631	ns	4.60	1.71	4.90	1.85	0.376	ns

表8. 「まえかがみ」姿勢に対する男性被験者の男性性・女性性の高得点者群・低得点者群の因子別平均印象評定結果・標準偏差および高得点者群・低得点者群間のt検定結果。

因子	男性性						女性性					
	高得点者群 (N=9)		低得点者群 (N=9)		t検定結果		高得点者群 (N=9)		低得点者群 (N=9)		t検定結果	
	平均 得点	標準 偏差	平均 得点	標準 偏差	t値	有意 確率	平均 得点	標準 偏差	平均 得点	標準 偏差	t値	有意 確率
1. 自信決断因子	6.24	1.18	7.06	0.62	1.840	0.084	7.24	0.90	6.06	0.73	3.062	0.007
2. 対人感情因子	5.10	0.76	5.24	0.82	0.386	ns	5.29	0.09	5.05	0.63	0.648	ns
3. 緊張因子	4.52	1.84	3.74	1.45	0.990	ns	3.74	2.13	4.52	1.02	0.990	ns

表9. 「まえかがみ」姿勢に対する女性被験者の男性性・女性性の高得点者群・低得点者群の因子別平均印象評定結果・標準偏差および高得点者群・低得点者群間のt検定結果。

因子	男性性						女性性					
	高得点者群 (N=10)		低得点者群 (N=10)		t検定結果		高得点者群 (N=10)		低得点者群 (N=10)		t検定結果	
	平均 得点	標準 偏差	平均 得点	標準 偏差	t値	有意 確率	平均 得点	標準 偏差	平均 得点	標準 偏差	t値	有意 確率
1. 自信決断因子	6.47	0.96	6.48	1.08	0.036	ns	6.87	0.94	6.08	0.93	1.867	0.078
2. 対人感情因子	4.86	0.99	5.16	0.69	0.781	ns	5.10	0.64	4.91	1.95	0.478	ns
3. 緊張因子	4.40	1.46	4.90	1.01	0.893	ns	4.37	1.00	4.93	1.45	1.019	ns

情因子」と第3因子の「緊張因子」ではいずれの群間にも有意差は認められなかった。

#### IV. 論議

因子分析の結果、本研究では「自信決断」「対人感情」「緊張」の3因子が抽出された。これは工藤・西川(1984)の因子分析の結果をほぼ支持するものであった。今回の「まえかがみ」姿勢に限っての印象評定結果を見ると、主に「自信決断」因子に含まれる項目でこうした姿勢の非言語的情報を読み取る傾向が見られた。「まえかがみ」以外の他の姿勢ではまた違った因子に含まれる評定項目によってその姿勢の持つ非言語的情報が読

み取られるのであろう。

Riskind & Gotay (1982) はうつむいた姿勢の人物の写真と直立の姿勢の人物の写真を提示し、その人物が今どんな気持ちであるかを聞いたところ、男性と女性ではその答えに違いがあったことを報告している。また、Rosenthalらは非言語的なものに対する感受性テストを用いて個人の非言語的な情報に対する感受性を調べたところ、女性のほうが高い感受性を示したと述べている。そしてその理由として、女性のほうが男性に比べて社会的地位が低く押さえられている場合が多く、その結果、他者が発する非言語的な情報に対して敏感になったのではないかと考察している。本結果では「まえかがみ」姿勢に対する印象評定に、従来報告されているような性差は認められなかった。本報告は比較的少数の被験者による予備的な分析であり、従来の性差に関する知見との不一致については、さらに被験者数を増やしての検討が必要であろう。本結果では、単なる性差は認められなかったが、男性および女性の男性性の低さと女性性の高さが「自信決断因子」を中心に「対人感情因子」を含みつつ、「まえかがみ」姿勢の持つ否定的な非言語的情報をより強調して読み取る傾向が示された。女性被験者の男性性の低さと女性性の高さは、「まえかがみ」姿勢の印象を同様におおむね否定的に強調する傾向にあった(「緊張している—くつろいでいる」の1項目のみより肯定的に評定していたが)。こうした評定は「自信決断因子」「対人感情因子」「緊張因子」の3因子にわたっていた。このような男性被験者と女性被験者の低男性性と高女性性に見られた違いは、今回の男性および女性被験者の性役割得点の不均衡(女性被験者の両得点の低さ)に規因するものなのかもしれない。本結果は、単なる性差ばかりではなく社会的に期待される性役割のような側面が、姿勢の持つ非言語的情報の読み取りにある種の影響をおよぼしている可能性を示唆している。社会的な地位が、非言語的情報に影響を与えていることを報告する研究も見られている(ボンド・白石, 1973)。今後、このような視点と性役割とを関連させ

た検討も行なってみる必要があるだろう。ただ、本分析はあくまでもイメージの中の「まえかがみ」姿勢を対象にした少数被験者の事例的な分析にとどまっており、人間のとりうる多様な各種の姿勢に対してまでもこの結果を一般化することには慎重でなければならないだろう。また、今回の性役割の測定にはBem Sex-Role Inventoryを用いたが、さらに、適切な性役割尺度の適用も必要なのかもしれない。

いずれにせよ、姿勢の持つ非言語的情報の読み取りの敏感さについての検討にはこうした性役割などの影響も考慮する必要があるのであろう。

## V. 文献

Bem, S.L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.

ポンド H. M. ・白石大介 1973 面接者の「姿勢」と「地位」が非面接者に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 13, 11-21.

春木 豊 (編) 1987 心理臨床のノンバーバル・コミュニケーション  
—ことばでないことばへのアプローチ— 川島書店

工藤 力・西川正之 1984 姿勢の意味次元構造の検討 心理学研究, 55, 36-42.

Riskind, J.H., & Gotay, C.C. 1982 Physical posture: Could it have regulatory or feedback effects on motivation and emotion? *Motivation and Emotion*, 6, 273-298.